

新世紀のキャンパス

Campus of New Century

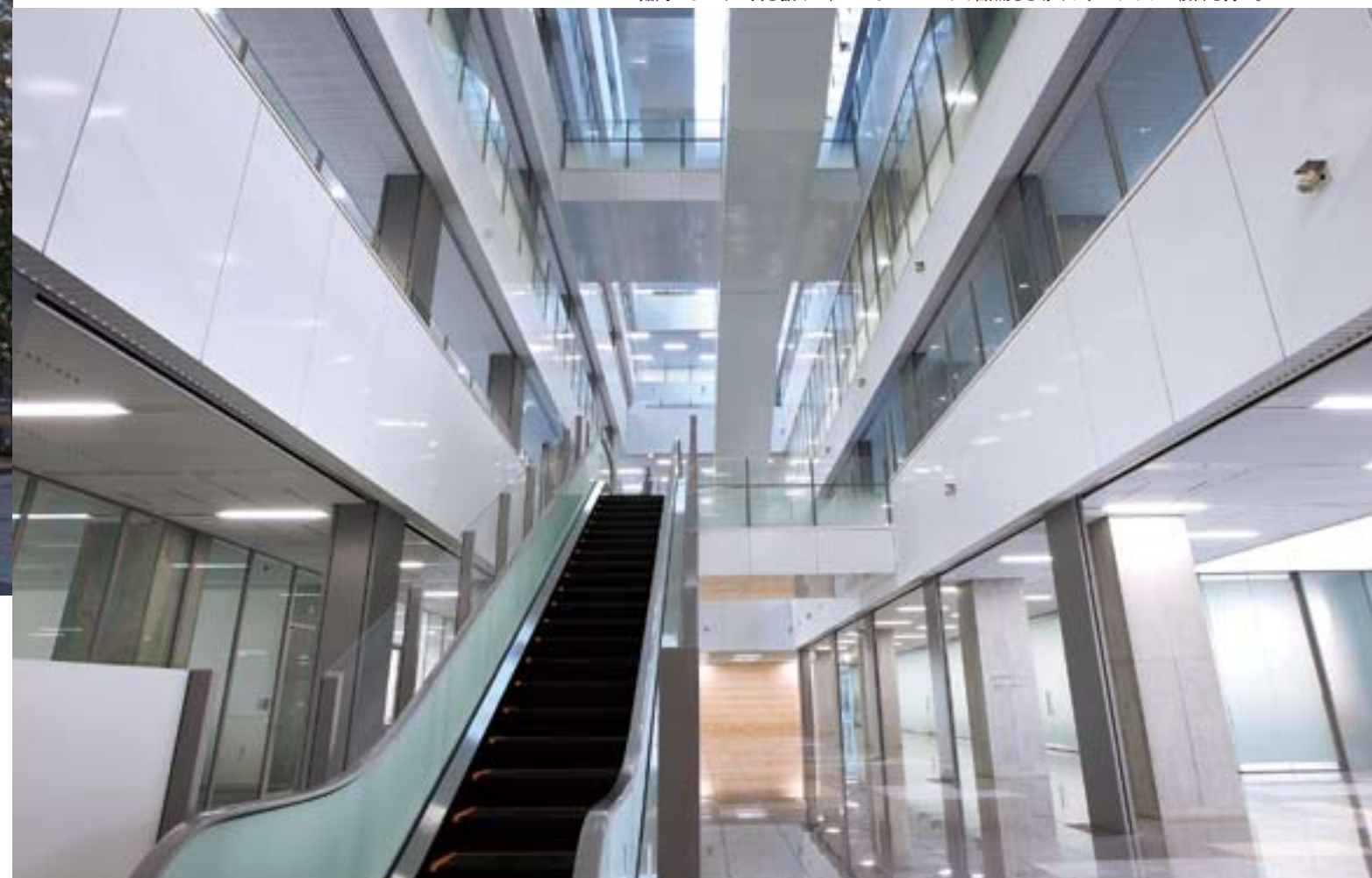
# 帝京平成大学 中野キャンパス



設計コンセプトは“中野の森に浮かぶ大学・森の緑と連続する”。警察学校跡地のケヤキの木立をランドマークとして移植し、学内のガラス窓には木漏れ日パターンを施し、影で半屋外を演出した。



屋上も“森の緑との連続”を意識し、緑を主体に木漏れ日(植物)パターンをモチーフとしている。



館内に3つある吹き抜けは、7Fから1Fにかけて自然光を導くトップライトの役目を持つ。





現代ライフ学部児童学科の実習室。ガスレンジやシンクをカバーすることで、調理実習以外にもアイロン掛け、ミシン掛けなど多目的利用で稼働率を上げた。



クリーンベンチという装置の中で注射薬の製剤を行う薬学実験室。

帝京平成大学は2013年4月に中野キャンパスを開校した。千葉県市原市で開学し、幕張、ちはら台と県内にキャンパスを作ってきたが、2008年の池袋キャンパス開設を起点に都心回帰を決意。次の候補地を探す過程で中野区との大学誘致計画がまとまった。「全国で少子化が進む中、人口の流入が続く東京を目指した。中野地域なら医薬系大学がないことから、正しい判断だった」と安西偲二郎副学長兼薬学部長は語る。

中野キャンパスには、千葉から薬学部とヒューマンケア学部看護学科を、池袋から現代ライフ学部を移転した。実際に中野に来てみると、病院、区役所、公園、学校や住宅街の中で、大学の果たす使命がはっきり見えたという。それは、大学、病院、公共施設を中心に

メディカルサイエンスシティともいえる、健やかな街を創世することだ。

現在、池袋、中野、千葉、幕張、ちはら台とキャンパスは5つになり、池袋キャンパスは本部機能、千葉県内の3キャンパスは千葉県の地域医療とスポーツの拠点として教育を展開しているが、中野キャンパスには、医療を中心とした地域密着型医療・研究拠点の役割を想定している。

約6万2000㎡と同大学の最大の延床面積を持つ新キャンパスでは、建学の精神「実学」を体現する最新設備の実習室を充実させた。地上12F、地下1Fの校舎には、2～6Fの低層棟部分に実習室と教室を同じフロアで隣接させ、実習室をスケルトンにすることで日常的に実習に触れられる空間とした。主な設備では、地下1Fに先端

技術開発センター、1Fにエントランスホール、事務室、食堂、2～4Fに薬学実習室、5Fに現代ライフ学部の実習室、6Fに看護学科の実習室、7Fに教室、屋上庭園、8～9Fに図書館、教室、10～12Fに研究室が配置されている。

薬学部は、開学から27年と若い大学のため歴史も浅く、地の利の問題もあり、6年制に移行してからは次第に入学者の確保も難しくなってきた。そこで中野移転に焦点を当て、4年間かけて様々な改善策を講じてきた。2013年度入学生は入試の平均スコアも高く、志願倍率も5.8倍をマークした。立地と最新設備が奏功し、学生も教室の雰囲気もがらりと変わったという。中野移転は大成功といえよう。

昨年度の診療報酬改定もあり、病院薬剤師も薬局薬剤師も就職は好調だ。ただ数年後は出口の問題が迫ってくる。「教育・研究の目的はアウトカムが大切。社会が求めるものにマッチしていないといけない。3つの学部がそれぞれの強みを発揮し、中野キャンパスが大学全体を引っ張れるように頑張りたい」と安西副学長。将来ビジョンの実現が待ち遠しい。

(本誌 能地泰代)

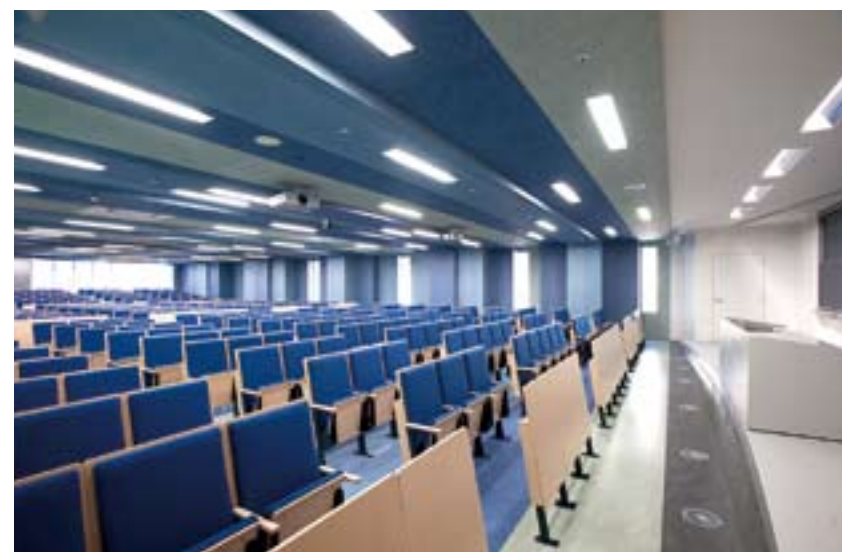


アリーナは振動が出るため1Fへの配置が多いが、同大学では教室や実習室と同等に位置づけ、あえて建物中央の5Fに設けた。実習の様子を5Fと7Fから観覧することができる。



現代ライフ学部のトレーナー・スポーツ経営コースが利用するトレーニングルーム。アスレチックトレーナーのスキルを身につける。

地域にも開放している528席の食堂。イタリア製のカラフルなメラミンを天板に利用し、テーブルクロスを敷いているような演出を施した。



講堂的要素を持ち、391人が収容できる中野キャンパス最大の教室。帝京大学グループのシンボルカラー「エモーション・ブルー」を配した床材をカラーコピーして、天井までをラッピングした。